

## 実録フィクション

## さいはての CMr (コンストラクション・マネジャー)

第 12 回

加納恒也  
公益社団法人 日本建築積算協会  
副会長・専務理事

## 【最終回】

あらすじ

大幅な予算超過により混乱を極めた「今宮市海崎プロジェクト」は、設計変更による工事費増額も議会承認され、補助金対象である交流施設の期末出来高も確保できる見通しとなった。県の出来高検査を間近に控えた3月なかば、天野の体に異変が。

[登場人物] 天野清志：高尾建築研究所 チーフ・コンストラクション・マネジャー  
高尾 哲：高尾建築事務所・高尾建築研究所 社長  
吉野 清：高尾建築事務所 取締役  
春馬竜之：高尾建築研究所 コンストラクション・マネジャー  
菊川 進：高尾建築研究所 コンストラクション・マネジャー  
内村利幸：今宮市プロジェクト推進室 課長補佐  
石崎明人：今宮市プロジェクト推進室 主任技師  
逸見紅郎：逸見建築事務所 代表取締役  
長浦 浩：長浦構造設計事務所 代表取締役

(2015年東京)

財前一義：夢設計コスト管理統括部長  
金剛辰雄：六星設計CM部長  
小林啓二：一ツ木PM取締役、小林積算取締役

## SCENE 33

## 異変

「春馬くん、至急救急車を呼んでくれないか。頭痛がひどくなって、我慢できない。2日にわたる激しい頭痛だと言ってくれ。」

天野は、頭痛をこらえながら、素早く衣類や身の回りの品をバッグに詰める。遠くから、サイレンの音が聞こえてきた。

今宮市の郊外にある県立病院の救急外来は、予想していたより混雑はみられなかった。医師の診察後にMRIなど数種類の検査を行ったが、特に異常が認められなかった。とりあえず入院して様子を見る

ということで、鎮痛薬を飲み、ベッドに横たわる。なんとか頭痛はおさまり、睡魔が体を包んでいく。

“チチチチ”という鳥の音が聞こえる。

天野はうっすらと目を開け、“はて、俺はどこにいるのだろう”とぼんやりした頭で考えるが、なかなか状況が掴めないまま再び眠りに引き込まれていく。

「天野さん、そろそろ起床の時間ですよ。」

女性の明るい声に目を開ける。今度は一気に記憶がよみがえった。

“ああ、昨日救急車で運ばれてきたんだっけ。頭痛は治ったようだな”上半身を起こしながら、「おはようございます」と声を出す。

「天野さん、どうやら頭痛の原因が分かったみた

いよ。」

看護師は、笑いながら天野を見つめている。

「えっ、分かったんですか。今ですか？」

分かったと言われても、何がなんだか分からない。

「もう少ししたら、先生の回診があるから、そこでお話を聞いてください。もう心配要りませんからね。」

それじゃ、とって看護師は足早に去っていく。

医師の説明によると、頭痛は带状疱疹という病状が引き起こしたのだという。带状疱疹とは、水疱瘡が治癒した後、ウイルスが死滅せず神経節の中に潜伏するが、免疫力の低下などをきっかけに再び活性化することで、強い痛みなどを引き起こす病気のようなのだ。天野の場合、三叉神経という頭の側面にある脳神経のひとつにウイルスが住みつき、悪さをした結果、激しい頭痛を引き起こしたようだ。

結局、初期治療が遅れたこともあり、1か月ほどの入院が必要となった。左側の三叉神経が支配する左頬から顎および唇にかけて発疹ができ、麻痺も広がっていく。朝方に天野の顔を見てにこやかに笑った看護師は、唇にぽつんとできた発疹を見逃さず、带状疱疹だと判断したようだった。

1か月の入院は、体も心も疲弊しきっていた天野にとって、まさに“早天の慈雨”といえた。あわてて駆けつけた家族や会社の同僚は、このような遠方では十分なこともできない。逸見夫人が身の回りの面倒をみてくれるおかげで、なんとかゆっくと入院生活を送ることができる、と期待したところだが……。

補助金対応の出来高検査が間もなく始まる3月なかばである。見舞と称して、内村をはじめとした市役所のメンバーがしばしば打合せに訪れる、赤坂建設など統括施工管理会社も連れだって相談に来るなど、出来高検査への対応がつづき、3月末になりようやく入院患者らしい日常を送ることができるようになった。

みちのく岩木県の中でも、今宮市など大平洋沿岸は気候が温暖であり、春の訪れも比較的早い。退院当日の4月11日は、温かな風に誘われて桜のつぼみもほころび、少し生きかえったようだ、と、天野の

気分も高揚する。顔の左下半分は麻痺したままであるが、重苦しい疲労感は払拭されていた。

「天野さん、退院おめでとう。しばらく東京でゆっくりしてください。」

病院まで迎えに来た、逸見夫妻および春馬・菊川と駅前で昼食をとった。逸見は、春馬とともに盛山まで天野を送っていくつもりだ。

## SCENE 34

### 一ツ木PM会議室(2015年)

「天野さん、大変な目に合いましたね。まあ、今宮市ではほとんど毎日が大変だったようですが。」

夢設計の財前が、ワインを注ぎながら話しかける。

「退院後は、しばらくのんびりされていたのですか。」

六星設計の金剛は、自身も顔が麻痺したかのように、左手で顎をさすっている。

「東京では、1週間ほどゆっくりしました。もっとも、顔面麻痺のため、毎日針治療に通っていましたが、広域施設(物販)は出来高をクリアーしましたが、内部についてはこれからが本番ですし、タラソセラピー施設は、躯体も相当残っています。設計変更もまだ続いていますので、コスト管理も手を抜けません。市からは、盛山に出迎えにいくと、日時まで指定されましたよ。」

「人気者はつらいですね。すいません、14年も経ったのですから、これくらいの冗談は許してください。」

小林啓二が軽口をたたく。

「結局、4月20日には今宮に戻りましたが、戻って早々に、また事件勃発です。」

「エー、どうしたんですか。」

「タラソセラピー施設を設計した、タラテラ・コーポレーションがとうとう離脱したのです。もともと、設計のやり直し時点から及び腰で、頼りにならない存在でしたが、4月以降の工事監理を辞退したのです。我々は、これを見越して他のタラソ施設を研究していましたし、逸見さんを中心に、設計仕様を全面的に見直すことにしました。今までに様々な提案をしてきましたが、タラテラが了承しないものが大部分でしたので、これであまく進んでいくものと安

堵しました。」

「離脱して喜ばれるとは、やはり難しいプロジェクトでしたね。」

啓二のもっともらしい感想に、天野は苦笑する。

「さて、これからは竣工に向けて一直線というところですが、やはり曲がりくねった道が続いていきました。ああ、小林さん、白ワインありますか。」

天野は、酔いが回ってきたのだろう、昔を思い出すような目を奥の壁に向けている。

「高尾さんが、またひと騒動起こしましてね……」

## SCENE 35

### 今宮市(2001年5月)

ようやく体調も回復してきた5月はじめ、久しぶりに内村から電話があった。

「天野さん、お体の具合はいかがですか。ちょっと相談したいことがありますので、夕方5時頃に役所までおいでいただけますか。」

「内村さんからご相談の連絡をいただくと、胸が締め付けられるように緊張しますよ。」

「ハハハ、いつも予感は当たりますね。期待してください。」

軽口を叩き合ったものの、正直“またかよ!”とうんざりしている。

夕方5時20分に市のプロジェクト推進室に到着する。いつもどおり、会議室に入る。

「天野さん、お疲れ様です。お察しの通り、またややこしい話が出ました。」

いつもは無駄口から入る内村が、いきなり本題だ。

「実は、タラテラ・コーポレーションが設計を降りましたが、タラソテラピーの運営からも撤退するといってきました。彼らとしては、設計を行い、タラソテラピーの特殊設備工事を施工し、事業運営を引き受けるといった目論見できたわけですが、コスト超過をきっかけに、設計の主導権を奪われ、特殊設備工事は他社との競合になり厳しい金額での受注となりました。このまま事業を運営してみても旨味はないと判断し、設計とともに手を引く決定をしたものと思われま

海水を扱う特殊設備工事は、タラテラ・コーポレーションの独断場と思われていましたが、天野さんが、水処理大手の田原製作所に参加を働きかけた結果、厳しい競争となったわけですね。タラテラが落札したものの、おそらく赤字でしょう。面子だけで取ったということでしょうね。」

内村は、珍しく淡々と説明する。

「内村さん、運営を辞退したとなると、市はどこに運営を委託するつもりでしょうか。」

「いずれにしても、3セクが経営するわけですから、自主運営となるのではないのでしょうか。まあ、運営からの撤退についても気配はありましたので、現在公募している支配人の力量に頼るところが大きいと思いますよ。しかし、いい人材が応募してくれるか、博打ですな。」

「内村さん、今日はやけに達観しているじゃないですか。」

「このプロジェクトでは、実にいろいろな出来事があり、自分の力ではどうしようもない流れに運ばれてきたのですから、もうジタバタしても仕方ないと思えてきましたよ。やるべきことはやるつもりですが。」

「確かに、今回の経験では、運命論者が続出しそうですね。」

「ところで、もうひとつ、ややこしい問題が起きました。」

これまた、不意打ちである。

「そろそろ帰ろうかと思っていましたが、もうひとつあるとは?」

「天野さんの入院中に、議会の特別委員会が高尾社長から聴取した件はこの間お伝えしましたよね。」  
「ええ、杭の過大設計による補助金の返還と、それに関して鷺田大学へ損害賠償する件に関して、コスト超過の経緯について高尾へのヒアリングが行われた件ですね。」

「そうです。天野さんが入院されていることもあって、高尾社長にお願いしたわけです。ヒアリング時にもきわどい発言があったようですが、問題は、以前1月の特別委員会で天野さんが聴取を受けた際に作成した、事実関係を整理したメモを、高尾社長が机上に残してきたことです。」

「えっ、残してきた?」

「そうです、本人は、“うっかり忘れてきた”といっていますが、意図的に残してきたのだと思います。」

「しかし、どのような意図があったのでしょうか。」

「天野さんのメモには、過去の事実関係がかなり克明に書かれていますので、それをみれば、説明を信用すると踏んだのでしょうか。」

「しかし、あそこには、微妙な事実も書いていますので、逆手に取られると厄介なところもあります。高尾は、そのところを分かっていると思っていたのですが。」

「あの人の思考回路は独特ですからね、当たりも大きい、はずれも大きいですよ。今のところは、議員からもメモが残っていたという連絡しかありませんが、余計な騒ぎが起こらないかと心配しています。」

「5月末に特別委員会の査察があったのでしたね。」

「そうです。そこでなにやらおかしい質問が出たりしないかと。」

「起こってしまったことですから、状況をみるしかありませんね。」

「何か起こった場合は、天野さんに適切なお対応をしていただくようお願いします。」

「最後に、それが言いたかったのですかね。社長が起こしたことです、その場合は頑張りますよ。」

“事件が2つ起こったけれど、今のところ宿題はなしだ。今日は、春馬・菊川と久しぶりに焼肉だな。”

工事は順調に推移しているものの、工期が厳しいのは相変わらずだ。まもなく来るゴールデンウィークは残念ながら出勤となる。まあ、土日は休めるので、これでよしとするか。

## SCENE 36

### 思わぬ話

議会特別委員会の査察は何事もなく終わった。

タラソテラピー施設の工事が進んでくるに従って、案の定、様々な設計変更が生じたが、なんとか最終目標の金額以内に納まる見通しだ。特に、屋内の防水に関しては、全面プールのようなものであるため、順次水張り試験を行いながら、仕上げを進めていく。特に配管や器具の防水層貫通か所が多く、納まりの確認に神経を使う。

### 一本の電話

6月25日、一本の電話が入った。

「以前、ウエダでご一緒した大泉良雄です。お元気ですか。」

ゼネコン時代、専務取締役営業本部長として大型プロジェクトの受注に活躍した大泉からの電話だ。

### May 2001

Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

### June 2001

Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
				1	2
4	5	6	7	8	9
11	12	13	14	15	16
18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29
					30

東京支店時代には、一緒に受注への戦略を話し合ったり、発注者との交渉を行ったものである。

「なんとか生きています。大泉さんもお元気そうですね。」

「天野さんが今宮でCMをやっていると聞いたんだが、てっきり沖縄の今宮島かと思って、そちらに行こうとしたのですよ。ところが、岩木県と聞いて、折り入ってお願いしたいことがあって、そちらに伺いたいのですが。」

「それはビックリです。金曜日の夕方に東京へ出発しますので、わざわざお出でいただかなくても、土曜でしたら東京でお会いできますが。」

「それはありがたい。それでは、お宅の近くの喫茶店ででもお会いできますか。時間はおまかせしますよ。」

「14時に、都営渋谷線の北島駅の改札でいかがでしょうか。改札は1か所です。」

「港東区の北島ですね。了解しました。詳細はそのとき話しますが、ある企業の経営を手伝っていたきたいのですよ。それでは、30日に。」

“就職の話のようだ。どのような経緯で話きたのか、突然のことで頭も回らないが、これ以上考えても仕方ない。土曜日に分かることだ”

まずは目先の仕事と、パソコンに向き合った。

翌日、また一本の電話がきた。

「天野さん、福井です。お元気ですか。」

積算部時代の上司であった福井陽一からだ。定年は過ぎたが、今も積算部で仕事に精を出している。「福井さん、お久しぶりです。いろいろひどい目にあっていますが、なんとか生きています。」

「大変ご苦労されていることは、積算部の方からも聞いています。実は、お伝えしたいことがあるのです。」

「昨日、大泉さんからお電話をいただきました。土曜日に東京でお会いすることにしましたが、何か関係があるのでしょうか。」

「松栄建設はご存知ですね。」

「ウエダの子会社の松栄建設なら、社員の皆さんも存じ上げていますよ。」

「ウエダが松栄建設を売却しました。いわゆるM&Aです。買主が、新しい経営陣を集めています。」

大泉さんは、代表取締役副社長として、経営の中樞を任せられるとのこと。技術陣を束ねる役員が必要とのことで、私に相談がきましたが、即座に天野さんを推薦したんです。大泉さんも喜ばれて、早速天野さんに会いに行くと言っていました。

勝手に天野さんの名前を出してしまって、冷静になって考えると、お詫びしないとならないと思い電話しました。」

「いやあ、そのようなお話をいただき光栄です。なにせ、今のプロジェクトが終わっていませんし、大泉さんのお話をうかがった上で考えてみようと思います。また改めて報告いたします。」

「そうですね、よく考えてみてください。今度一杯やりましょう。」

なるほど、これで話がつながった。福井と大泉は、東京支店の副支店長として、営業・積算の連携を強化した間柄である。営業の無理な頼みをなんとか前に進めようとしている福井の姿勢は、営業マンの間では伝説的に語られる。天野もその影響を強く受けている。大泉は、おそらく福井に役員就任を要請したのだろう。福井は、自分は辞退し、天野を推薦したと考えられる。

“これは、簡単に断れる話じゃないな”

実は、一月前、高尾から高尾建築事務所の副社長就任を打診されていた。資金管理が甘く、最近では恒常的に賃金支払が遅延する状況を何とかしたいとのことだが、この会社の体質はそう簡単には変えられない。トップが交代すれば可能性もあるが、そんなことはありえない。数日考えたことにしたが、即決に近い形で、副社長就任を断った。そんな経緯から、プロジェクトが終了したら退社するかと考えていた矢先の電話だった。

しかし、ゼネコンの体質に違和感を覚え、CMの世界に踏み出したばかりだということに、またゼネコンに逆戻りかと、これもすんなりと受け入れられない。結局、いつものように焼肉屋で酔いに身を任せよう。

「春馬くん、菊川くん、そろそろ上がろうか。」

## プロコンへの誘い

6月30日(土)午後2時、天野は、北島駅前のドトー

ルで大泉と向き合っていた。

「お忙しいところを、お時間をいただき有難うございます。」

「大泉さんに久しぶりにお会いできて嬉しいです。噂では、ご実家の旗屋さんの経営に専念されていたと聞いていましたが。」

「いやあ、旗屋は順調にいらっていますが、そろそろ息子に任せようと思っています。ちょうどそんな時期に、稲山くんから連絡がきたんですよ。ほら、若手営業マンとして、元サッカー選手の中山欽ちゃんの部下だった、稲山亨ですよ。」

「やくぎの中山課長と、頑張りますの稲山コンビですか。」

「稲山くんは、ウエダを退職してから、マンションのモデルルーム建物に特化したデザイン&建設会社を立ち上げ、ニッチな分野ながら結構な成功をおさめたようです。いまや、売上は20億を超えているそうです。今回、三橋銀行の融資を受けて、ウエダの子会社である松栄建設を買収したわけです。」

いまや、ベンチャービジネスの若手経営者としてもはやされる存在なのだという。年齢はちょうど40歳という、脂の乗り切った年代だ。

彼は、松栄建設を、単なるゼネコンではなく一定の分野に強味を集約させた『プロコン』に変身させたいのだという。現在の本業である、モデルルーム事業との相乗効果を狙いたいとの考えもある。

ウエダ時代の上司であった大泉をスカウトし、その人脈で経営陣を構成する考えだ。ウエダからの出向者を中心とする現経営陣は退場予定だという。

「実は、先日、福井さんからも電話をいただきました。」

天野は、福井との会話を話しておいた。

この日は、返事は保留した。稲山から、妻ともども会食したいとの申し入れもあった。

「折角のお話しですから、よく考えたいと思います。なにせ、一度転職したばかりですし、家族ともよく相談します。私は、稲山さんにお会いしようと考えていますが、家内の意見も聞いてみます。改めて連絡させていただきます。」

携帯番号とメールアドレスを交換し、ひとまず帰宅する。

高尾建築研究所の度重なる給与支払遅延に怒り心頭だった天野の妻は、稲山とお見合いに乗り気で、早速会食がセットされた。すがすがしい笑顔を見せる若手経営者への期待を膨らませて、天野はプロコンを目指す松栄建設に入社を決めた。常務取締役設計画本部長、営業、工事を除く部門の統括であり、プロコンへの変身を推進する責任者でもある。正式入社は、プロジェクト終了後の11月1日だが、9月から経営計画策定に参画する必要がある。この件は、高尾にははっきり伝え了解をとった。さすがの高尾もがっかりした様子を見せたが、こころよく了承したのはさすがに苦労人だ。

順調満帆で松栄建設に入社した天野を待ち受けていた驚愕の事実とは……。

今回の物語には関係ないので、またの機会に!

## SCENE 37

### 竣工に向けて

今宮に戻った天野の日常は、再びプロジェクト進行にひたりにきっている。

この間、KM協会東北支部主催の講演会を依頼されたり、男鹿県建設業協会の今宮方式CMについてのヒアリングに同席したり、メディアの取材や執筆依頼に対応したりと、本業以外にも時間をとられる。

別途であった外構工事も発注され、去年はゆっくり楽しめなかった花火大会や夏祭りを堪能し、竣工に向かって工事も順調に進んでゆく。

東北でも夏の暑さが感じられるお盆過ぎ、準備工事を請け負っていた坂井鉄工所が民事再生法の申請をしたというニュースが飛び込んできた。準備工事には仮設事務所や仮囲なども含まれているため、契約は継続中である。また、本体の鉄骨工事も下請として請け負っているため、工事への影響が懸念された。幸い、再建のスポンサー企業も現れ、関係者は胸をなでおろす。

9月なかばに入ると、市議会で鷺田大学提訴が可決された。杭の過剰設計による補助金返還に関する7,000万円以上の損害賠償だ。この頃になると、コストもほぼ固まり、工程も見通しが立って、完成検査への打合せが進められる。

一方、松栄建設の新経営計画の策定が進められ、天野が東京へと向かう回数は増えていった。非公式ながら、取締役会にも出席し、人事制度の改定にもとりかかる。

9月なかばから、監督員検査が始まり、主事検査や市および県の完成検査が続く。10月に入ると引き渡し準備に入り、別途工事の最終確認や取扱い説明会となる。

## SCENE 38

### 落成式

10月31日(土)10時から落成式が始まった。隣に座った春馬から異臭がする。どうも、昨夜、農政振興事務所の若手職員と意気投合して、飲み歩いたようだが、にんにくをたらふく食べたようで、体中の毛穴から突き刺すような刺激臭が立ち上がってくる。

「春馬、お前はしばらく遠くへ行って来い。」

と言いたいものの、苦労した末の落成式だ、臭いは我慢して喜びを共有しよう。

「春馬くん、少し水を飲みなさい。にんにくの臭いが薄まるかもしれないよ。」

「申し訳ありません。昨夜は、はめを外してしまいました。」

熊本市長の挨拶から始まった式典は終盤を迎えた。今回のプロジェクトへの功労表彰となったのだが、統括施工管理会社2JVと1社の表彰が終わると、受賞者挨拶で式典はお開きとなった。設計者もCMrも表彰状の授与はなく、天野は湧き上がってくる怒りを抑えるのに苦労した。

高尾建築事務所が設計の一員として工事費設計書の改竄に関与し、また様々なトラブルを引き起こしたことは事実であるが、自費で設計修補を成し遂げ、プロジェクトを最後まで進めた功績は、きちんと評価してもらいたかった。設計者である逸見についても同様で、彼が頑張らなかつたら、プロジェクトは空中分解していたはずだ。自分たちの保身で、表彰者を選別した役人の根性を見せられたと、天野は急に暗い穴に落込んでいく気分になる。高尾は表情を変えないが、同じ思いに違いない。

「高尾さん、皆さん、広域の2階に席を用意しています。喉も渴いたでしょう。早く一杯やりましょう。」

天野達の気持ちを察したのか、石崎が皆に気をつかう。

まあ、ここで落込んででも仕方ない。呑もう。

「天野さん、お疲れ様でした。いろいろありましたが、やっと完成しました。有難うございました。」

口髭を蓄え、謹厳な顔をした逸見が、お銚子を片手に隣の席に座った。

“ああ、最初の出会いと同じだな”今夜は、腹心の友とゆっくりと語りあおう。

## SCENE 39

### 再びツ木PM会議室(2015年)

「竣工、お疲れ様でした。」

財前が、ワインを注ぎながらねぎらう。

「しかし、表彰もされなかったなんて、役所も冷たいですね。」

金剛が気をつかう。

「まあ、今となつてはどうでもいいことですがね。役人は個人的には良い人が多いのですが、役所の論理となると違った顔も出てきます。プライベートでお付き合いする方は限られてしまいますね。」

「ところで、CMとしてのミッションは成し遂げられたのですか。」

財前が本題に入る。

「工事費については、設計追加などで予算を1.9億円超過しました。全体工事費に対する比率としては、約7%の超過ですね。」

約11億円の補助金については、3年度にわたり予定通りの出来高をあげましたので、最重要ミッションはクリアしました。杭の過剰設計として返還した7,000万円は、鷺田大学が賠償しましたので、市の負担とはなりませんでした。もっとも、高尾建築事務所が鷺田大学から500万円の賠償請求されたのは、おまけですね。」

「工事費設計書を巡る責任ですね。」

「そのようです。二つ目のミッションである、地

元の経済効果、すなわち地元企業の参画ですが、1次下請・2次下請を含めると、今宮市の企業参加率は55%になりました。また、県内企業まで拡大すると、68%になります。この数字をどう評価するか難しいところですが、今宮市の規模からいって、14億円もの工事を請け負ったのですから、目的は十分達成したと判断しました。」

「たしかに、首都圏の中核都市でも、専門工事を受注できるレベルの企業はそれほどいませんからね。これだけの数字になったのは、大成功といえますよ。」

金剛も、地方公共団体の地元貢献目標に悩まされているようだ。

「今回の方式で、清掃片付けやハツリなどの変動要素については、どう管理されたのですか。」

「清掃片付け費は、ゼネコンと話し合い、毎月の目標人工を決めました。それを週に割り振り、毎週の実績と照らし合わせていきました。お互い、納得いく目標を設定すれば、ゼネコンも努力してくれます。一般的な請負現場と同じやり方ですね。」

廃棄物処理も同じです。これは、専門会社と契約しましたが、同様にゼネコンと一緒に台数確認を行い、コントロールしました。また、梱包ではなくパレット搬入にするなど、廃棄物発生を抑制しました。」

「ハツリについては、誰が費用を負担したのですか。」

「型枠工事にはハツリ費用が含まれます。ただし、これは型枠に起因して躯体が変形したような場合であり、その他の原因の場合は協議となります。実際に、発注者が負担したものもあります。そのための予算は別に確保しておいて、必要に応じてゼネコンへの追加費用としました。」

これ以外にも、共通仮設のレッカーですとか、とりあえず数量を設定し契約しておきますが、実費精算となる項目はかなりありました。」

「今宮型CM方式については、いかがでしたか。コストを巡るトラブルがなかったものとして。」

小林啓二の質問に、

「コストの問題がなくても、二度とやりたくないね。工事を分割して施工段階でコストを下げるなん

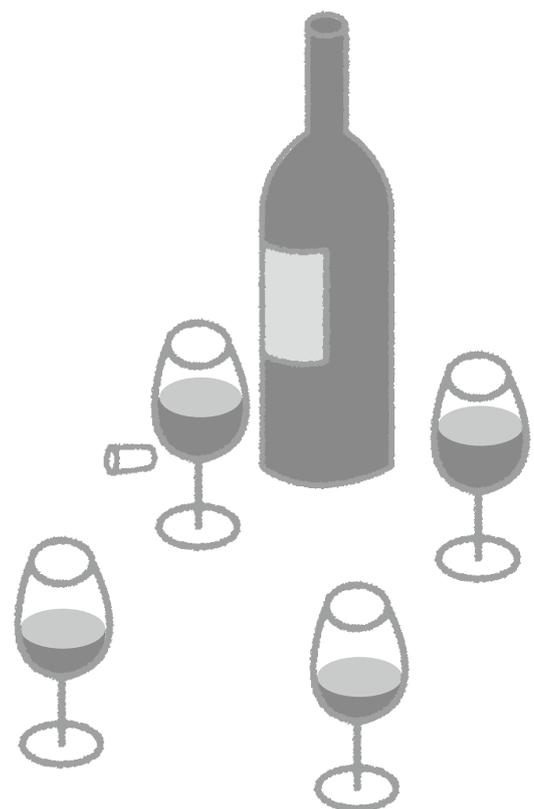
て、効果はしれたものだよ。一般の発注者にとっては、パッケージごとの発注費用を知る必要性もないしね。」

まず、設計段階でコストコントロールを行うことが大切です。海崎プロジェクトだって、このところをきちんとやっていなかったからトラブルじゃありませんか。CMはピュアCMが一番だよ、設計から発注段階までが勝負でしょう。」

「震災復興で活用されたアットリスク型や、オープンブック方式などがありますが。」

「どれが良い悪いというものではありませんが、原価を開示するといっても、契約外で引き去りをしたり、複数案件の抱き合わせ契約で金額調整するなど、悪さをする気になればいろいろできます。だからといって、オープンブックを否定するものではありませんが、これが一番透明だというのは誇大広告でしょうね。透明性・公正性からいえば、ピュアCMに勝るものはありませんね。」

いやあ、調子に乗って、強引に持論を展開しましたね。財前さんは、分割発注方式にも興味をもたれていますので、この議論は仕舞にしましょう。」



最後に、まとめというか総括としてはいかがですか。

「海崎プロジェクトでは、つくづく設計段階のコストコントロールの大切さを思い知りました。これが一番の収穫です。私が今進めているCMの核となるものです。

もうひとつ、人間関係です。信頼に結ばれたチームであれば、相当な仕事をやり遂げられると思えました。設計の逸見さん・長浦さん、市役所の石崎さん、高尾総研の春馬くん・仲間くん・菊川くんなど多くの同士とゴールにたどり着いたことが、一番の収穫ですね。そうそう、柚木夫人と出会ったことも忘れられませんね。」

「長い間お話を聞かせていただき、有難うございました。たしかに、厳しいプロジェクトの中に、印象的な出会いも多くあったのですね。CMrのスピリットも伺いましたので、今後の糧にしたいと思います。松栄建設の話は、次の機会に楽しみにしていますよ。それでは、『さいはてのCMr』天野さんに乾杯しましょうか。」

## エピソード

2011年9月、今宮市海崎埠頭に佇む2人。

「建物は残ったものの、周りは全て流されましたよ。天野さんのご提案で2階は嵌め殺し窓にしましたので、海水は浸入しませんでした(笑)、地下の機械室・電気室が浸水したものですから、全てやりかえなければなりません。」

逸見は、案内しながら説明しようとして、エントランスに打ち付けられた合板を剥がして、天野を中にいざなう。

2011年3月11日、この一帯は津波の下に沈んだ。高台にある魚協ビルの敷地に据えられたNHKの定点カメラからは、巨大津波に浮かぶ無数の車が延々と映し出された。この下に広域とタラソテラピー両施設があるのかと、天野はテレビを食い入るように見ていたものだ。

明日は1日中ボランティアで、避難所のお年寄りの世話をする予定だ。

「タラソテラピーは、おそらく取り壊されるでしょう。2年前、近くに温浴施設がオープンしてからは経営が悪化したようだから、ちょうど店じまいするタイミングかもしれないな。広域施設は道の駅として繁盛しているのだから、改修する予定ですよ。」

「そうですか、半分なくなるとはやはり寂しいですね。」

「まったく、汗と涙で作り上げたからね。」

「汗と涙に、酒も加えてくださいよ。」

「そろそろ、春馬くんと仲間くんが着く頃ですね。石崎さんも店に来る時間です。」

「春馬くんには、家によって家内を連れてきてくれと頼んでいます。」

「それでは、久しぶりに今宮の海の幸をいただきますでしょうか。」

ふと埠頭入り口の道路に目をやると、小柄な人影がこちらに向かって歩いてくる。

「あゝおばあちゃん！」



この物語はフィクションであり、登場する機関・企業・団体・個人は実在のものではありません。

積算協会ホームページに掲載されています。